

推薦入試が始まり開戦の火蓋が切って落とされたようです。競馬で言えば、第四コーナーを回って最後の直線コースに入ったところでしょうか。今までペース配分で押さえてきた力を最大限に出すところかも。ペース配分で思い出すのは、ある大学で入学早々の体力検査のとき、100メートル走があったのですが、担当の先生から「君らは受験勉強で体がなまりきってる。せやからペース配分に気をつけて走るように」と注意があったとか。ともかく、最後の時期には知っていることを誤りなく試験用紙に書き留めることができるように、知識の整理をしてください。でも人が物事を知ることができるという事実自体、本当は不思議なことなのです。西洋近代の哲学者たちの努力は、その謎を解いていくことに当てられています。

今日は近代哲学の最高峰と思われるエンマヌエル・カント（1724~1804）について。この人は当時プロイセンと言われた王国の北部、バルト海に面するケーニヒスベルクという町（現在はロシア領でカリニングラードと呼ばれる）で生まれ、ほとんどこの町で一生を過ごしました。カントはまさに「きっちり山のきちたろう」と呼べるような人で、例えば毎日町を散歩することを日課としていたのですが、時間をきっちり守るので、町の人はカントが歩いているのを見て、時計の時間を合わせたそうです。



カントの哲学は批判哲学とも言われます。別にカントが他人の悪口ばかり言っていたというわけではありません。批判 critic というのは他人の悪口という意味ではなく、吟味という意味です。でも何を吟味するかと言えば、それは人の知る能力です。例えば、彼の主著は『純粋理性批判』という名前ですが、それは純粋理性（pure reason：理論的なことを扱う理性）が何を知ることができ何を知ることができないかを、吟味してやる、すなわち徹底的に調べてやるという意図を表しています。

その『純粋理性批判』の冒頭でカントは裁判の譬えを使っています。その裁判の被告席には理性が座っています。裁判官が、その理性に向かって「おぬしは色んな事を知る能力があると言っておるが、本当はいったい何を知ることができるのか。言うてみい」と尋問する。つまり、哲学の道を進む前に、まず理性の能力を吟味せねばならないというのです。これはデカルトやロックにも見られる態度でした。認識論を哲学の基礎に置くという、近代の特徴の一つです。

でも、ここで問題があります。この裁判所の譬えでは、被告席に座るのは理性ですが、ならばその被告を裁く裁判官は誰ですか。答えは、「裁判官も理性です」でしょう。ところが、その裁判官は「まだ物事を正しく認識できるかどうか」を審査されている途中なのです。つまり、物事を知ることができるかどうか分からない理性が、裁判官を務めるということは、矛盾ではないでしょうか。別の譬えで言うならば、物事の判断ができない子供に、他の同年代の子供が物事の判断ができるかどうかを調べなさい、というのと似ています。つまり、そのような裁判は不可能なのです。敢えてこのように問うていくと、答えは必ず「理性は物事を知る能力があるかどうかは、わからない」となるのです。

実際、カントの結論はそうでした。途中を飛ばして結論だけ言うと（と言うのは、この途中の議論がきわめて難解なのです）、カントは、人間の理性は、物事の表面（これを現象；phenomenon）しか知ることはできない、言い換えると、物事の本質（あるいは実体）は知ることができない、と結論し

たのです。簡単に言うと、「ものが『どうあるか；How are they?』はわかるけど、ものが『何であるか；What are they?』はわからん」となります。カントの言い方に従うと、「人間は現象を知ることができるが、物の自体は知ることができない」となります。



以前、アリストテレスと中世スコラ哲学の考えでは、ものは実体 substance と偶有性 accidens からなっていると言いました。例えば、白い犬がいるとする。その犬の毛の色が茶色になっても、体重が増えても、背が伸びても、庭から公園に移動しても、あるいは飼い主が変わっても、同じ「犬」であり続ける。この表面の色、体重、大きさ、場所、所有者などは、偶有性と言って、独立して存在することができず、何かの実体の上に乗っかってのみ存在できる。それに対して、実体はそれ自体で存在する。

ところで、私たちが直接知ることができるのは、実体ではなく、偶有性です。偶有性は目や耳や触覚などの五感で知ることができるものだからです。それに対して、五感の実体（ものの本質。何であるか）を知ることができません。アリストテレスとスコラ哲学の主流は、人間はそれらの偶有性を通じて、実体を知ることができる、と言いました。先ほどの犬の例だと、人はまずその形や毛色や声を知るが、それらのデータから、それは「犬だ」と結論できる、と。

カントが否定するのは、この最後の点です。つまり、声や形や毛色を知っても、決して実体には至らない、と。これが、人間は現象は知り得るが、物の自体は知り得ない の意味です。例えば、一匹の犬がいるとする。その犬の色、形、毛並み、鳴き声などを知ることができるが、決してそれが「犬だ」とは知ることができない、ということです。

カントがよく言っていたそうですが、「わしは、次のことを知ることができたら満足じゃ。それは『世界、魂、神』の三つじゃ」と。しかし、『純粋理性批判』の結論から、この三つの一つも人間には知り得ないものとなりました。

ちょうどデカルトが数学（幾何学）のすばらしさに魅了されて、「哲学も数学と同じ仕方であれば、確実な学問になるはずや」と考えて、哲学の体系を作り上げようとしたように、カントは当時華々しい成果を出しつつあったニュートン（1643~1727）物理学を哲学のモデルにしようと考えました。しかし、哲学は存在するものすべてを扱おうとする学問であるのに対し、物理学は物質的な存在（五感で観察可能な存在）を相手にする学問です。それゆえカントの企ては不可能な挑戦だったのです。

一つの例ですが、ニュートン力学では空間と時間は絶対的なものでした。つまり、まず空間と時間があり、その中に個々の物が置かれるという図式です。しかし、伝統的な哲学ではまず物があり、その後で空間と時間が出てくる。アリストテレスは空間を「物と物の間」、時間を「物の変化の尺度」というように定義しました。おもしろいことに、アインシュタインの相対性理論によれば、空間も時間も絶対的ではないようです。カントは、「人間には生まれながら感性の中に空間と時間という座標軸を持っている。そして、外から入ってくる雑多なデータを、その座標軸の中に整理した形で置いていくのだ」と説明しました。彼の認識論は出発点から躓いたと言えるでしょう。

しかし、カントの偉大さは、もう一つの主著、『実践理性批判』にもっとよく現れます。